

## G30国際プログラム（学部）における日本語科目

### 2012年度報告

国際交流協力推進本部

初鹿野阿れ・徳弘康代

G30国際プログラム(学部)は、秋入学である。そのため、2012年度(平成24年度)春学期は1年生にとっては2学期目、つまり1年生の後期となる。本プログラムは、2011年秋に始まったばかりのコースであるため、今年度は特に履修指導に注意を払った。1年生が外国語の必修単位を満しているかを確認するとともに、適切なレベルの授業に参加できるよう指導を行った。

秋学期には新たに1年生が50名入学し、そのうち41名が必修科目、または必修以外の単位として日本語科目を履修した。秋学期の始めに、プレースメントテストを行い、個別面談にて履修指導を行った。

2年生で、日本語学習を続けたいと希望する学生には、G30国際プログラムで開講している授業および全学日本語プログラムの授業を紹介し、適切なクラスに出られるよう指導した。今年度の2年生は、必修単位の取得のため履修しなければならない学生を含め、18名(内1名は1年生再履修)が日本語学習を継続している。

#### 1. 国際プログラム(学部)における日本語科目

本年度、国際プログラム(学部)において開講された科目とその主な使用教材は以下の通りである。

春学期:

- ・総合日本語 2a・2b
- ・日本語セミナー(コミュニケーション) 2a・2b
  - 『日本語初級2大地』
  - 『みんなの日本語中級I』
  - 『Write Now! Kanji for Beginners』
  - 『Basic Kanji Book Vol.2』

秋学期:

- ・総合日本語 1a・1b
- ・日本語セミナー(コミュニケーション) 1a・1b

- 『日本語初級1大地』
- 『日本語初級2大地』
- 『Write Now! Kanji for Beginners』
- ・アカデミック日本語(文章理解・文章表現) 1
  - 『大学・大学院留学生の日本語1読解編』
  - 『大学・大学院留学生の日本語2作文編』
- ・アカデミック日本語(文章理解・文章表現) 3
  - 『大学・大学院留学生の日本語3論文読解編』
  - 『大学・大学院留学生の日本語4論文作成編』
- ・アカデミック日本語(聴解・口頭表現) 1
  - 『アカデミックプレゼンテーション入門』
- ・アカデミック日本語(聴解・口頭表現) 3
  - 『アカデミック・スキルを身につける聴解・発表ワークブック』
- ・ビジネス日本語 1
  - 『新装版ビジネスのための日本語』
- ・ビジネス日本語 3
  - 『新装版商談のための日本語』

ビジネス日本語1及び3は、学内からの要請が高く、本プログラムだけでなく、名古屋大学全学に所属する留学生・研究生等に対しても開講されている。

#### 2. 学生の日本語学習に関する諸問題

G30国際プログラム学部生に対する現在までの日本語学習についてみられる問題をあげる。

##### (1) 他の科目との兼ね合い

学部によって履修科目に多寡があり、それによって負担の度合いも変わる。日本語が学生の負担になりすぎないように、テストを何度かに分けて、範囲を少なく、回数を多くして、他の科目のテストと重なりをできるだけ避けるように配慮している。また、出席とク

ラスへの参加度を重視して評価を行うなどの工夫をしている。

## (2) 学生のニーズの違い

このプログラムが英語で行われているので、日本語をほとんど必要としない学生もある。その一方で、卒業後日本の企業への就職を希望している学生も少なくない。日本語が必要のない学生の学習意欲は高くないが、日本企業への就職を希望する学生は日本で仕事ができる程度の日本語を身に付けたいと考えている。このような学生たちが混在する初級必修クラスでは、学生の負担軽減を考えつつも、卒業までにある程度の日本語を習得するために重要な基礎教育を行う必要もある。相反するニーズの中で、ある程度のレベルに達することを目標におき、現在の日本語コースは模索と発展途上の段階にあるといえる。

## (3) 日本語を母語とする学生への語学教育

G30の学生の中には、日本語を母語とする学生もいる。母語といっても、それぞれの状況によって能力には個人差がある。これらの学生は日本語能力試験N2レベル以上であれば、外国語科目必修12単位のうち6単位が認定され、残りの6単位は他の外国語か日本語で取れるようになっている。つまり、日本語を取ってもよいことになっているが、現在のところ、彼らのレベルとニーズに合った授業は用意されていない。そのため、既存のクラスで他の留学生と同じ授業を受けているが、彼らにとって問題となるのは、他の留学生たちとは違う部分である。例えば、日本語の日常会話には全く問題ないが、論理的な文章を構築することができない、流暢に話せるが漢字の読み書きにはコンプレックスがある、といった問題が個人個人で違った様相で起きている。今後の対策としては、能力試験により認定された6単位以外の必修単位は他の外国語で取ることを義務付け、日本語については、随意で授業が取れるようにすること、そして、日本語を母語とする学生たちへの日本語教育の専門のクラスを開講することを検討中である。

## 3. その他の活動

本プログラムの学生の何人かは名古屋大学基金より奨学金を受けている。その中から、2名の学生が選ば

れ、2月16日に行われた「平成24年度名古屋大学基金感謝の集い」においてスピーチを行った。2人は準備に十分な時間をかけ、多くの聴衆の前で、名古屋大学での勉学や生活、将来の夢について5分ほどのスピーチを行った。スピーチへの評価も高く、名古屋大学基金に協力してくださっている方々に、学生達のことを分かっただけいい機会となった。また、学生にとっても大学内外の方々と知り合い、話し合う機会を持つことができた。

また、3月29日には、スイスの大学と高校で日本語を教えている先生が訪問された。G30国際プログラム、アドミニストレーション・オフィスと連携してプログラムの概要、日本語科目の現状、学生の様子等を説明し、今後のスイスからの学生リクルートの可能性を探った。



「平成24年度名古屋大学基金感謝の集い」におけるスピーチ